

アドレナリン全開でコーナーをドリフト!

自動車部が所有するクルマは、スバル『プレオ』とホンダ『シビック EG6』の2台。以前は他の車種も所有していましたが、激しいレースで損傷し、スクラップになってしまったといいます。なにせレースはぶっつけ本番! 部員の中には、免許を取って初めて運転したクルマがレース用の車だった人もいます。『日常では体験できないスピードで、豪快にクルマを走らせられるのがレースの醍醐味』と語るのは、エンジン音が好きで自動車部の門を叩いた相澤さん。狭きオフロードを駆け抜ける軽自動車のレースでも、スピードは時速50~80kmに及ぶといいます。ブレーキを踏みコーナーへ入ると、クルマは自ずとドリフト。入部ホヤホヤでいきなり浅間山のレースを体験した米倉さんは、そのデビュー戦を「ビュンビュン抜かれるし何とかしなきゃと思いました、横転したら申し訳ないという気持ちもあって、葛藤しながら夢中でハンドルを握りました」と振り返ります。

「浅間軽耐久シリーズ」には、費用や整備に掛かる時間を鑑み、昨年は年4回出場。2016年には第2位や第5位に入賞したこともありましたが、コロナ過で部活動ができなかったこともあり近年は入賞が遠のき、完走もできない状況でした。しかし2023年6月のレースでは、15台中、第10位で見事完走。



2022年6月の浅間山耐久レース。タイヤが土手にぶつかった衝撃でシャフトがひしゃげてしまい、無念のリタイヤとなりました。



しかも途中クルマが横転、エンジンの一気筒がダメになったため、最後は皆で押してゴールしたというのだからドラマチックです。1年生で部長職を継ぎ、部員を鼓舞してきた浦野さんは、「自分が入部して初めての完走。それまでは修復不可能な故障でリタイヤすることばかりだったので、本当に嬉しかった」と感慨深げ。結果が出なくとも決してへこたれず、全員でレースに向き合ってきた頑張りが報われた瞬間でした。

無念のリタイヤをしたときのクルマも、手押しでトラックに積みました。



自動車部の活動で得た知見を、将来の“夢”へ繋げたい

12名と小所帯の自動車部の目下の目標は、部員獲得。そのために、SNSや世田谷キャンパスに設置されたデジタルサイネージ等を通じて活動の周知に努めているといいます。2024年には『世田谷祭』への参加も予定し、伝統の!?焼き鳥屋台を復活させたいそうです。今後は、ガレージに眠るシビックを蘇らせ、舗装路のレースに出場するのも目標に掲げる1つ。プラグはススだらけでエンジンもカスカスと道は長いですが、いつかの復活を夢見て、コツコツ整備に励んでいるのだそうです。

ちなみに将来の“夢”について聞くと、ほぼ全員がクルマ関係の仕事や研究に携わりたいようで「自動車部を通じて活動費の運用の仕方や、コスト削減を考える力が身につきました」と語る会計担当の金子さんは、「ウチの大学

は水素エンジンの研究で有名。研究室もたくさんあるのでぜひ学びたい」と目を輝かせます。情報科学科に籍を置く郷家さんは、「最近ではコンピュータと自動車が、密接な関わりを持つようになりました。授業で学んだコンピュータの知識と自動車部で得た知見を活かして、自動運転や燃費制御などの研究に携わりたい」と、その展望を語ってくれました。

「コロナも収束しつつあり、今後はもっと活動がやりやすくなると思うので、後輩のみんなには今まで出来なかったことも目いっぱい楽しんでほしい」とエールを送るのは、部長の浦野さん。転がっても諦めずに起きあがり、力を合わせてゴールしたあの耐久レースのように、部員それぞれが将来に向かい歩みを続け、夢を叶えてくれることを期待しています。



毎週水曜日は、和気藹々とした雰囲気の中、皆でクルマの整備を行っています。